

## ごあいさつ

障害の種類と程度に対応した教育から、一人一人のニーズに対応した教育へと転換が図られて3年がたちました。また昨年3月には、特別支援学校の学習指導要領が改訂されました。一人一人に応じた指導をより一層充実させることとされ、各教科にわたる個別の指導計画、家庭や地域および関連機関と連携した、長期的な視野による個別の教育支援計画の作成が示されました。一人一人に応じた指導の実施、個別の指導計画・教育支援計画の作成には、子どもの実態やニーズを的確に把握すること、生活全体を総合的にとらえること、生涯を見通した指導、支援のあり方を考えることが重要になります。

本校では、昨年度「一人一人のニーズを読み取り育てる取り組み」を主題とした研究に着手し、今年度は2年目となります。昨年度に開催した研究協議会では、このテーマに沿って、公開授業、ポスター発表、分科会、講演会を行いました。講演会では、国立長寿医療センター研究所の大川弥生先生に、「ICFに立った自立支援の理念と技法」についてお話いただきました。

ご存知のように、ICF (International Classification of Functioning, Disability and Health) とは、2001年WHO総会で採択された人間の生活機能と障害の分類法です。「国際生活機能分類」と訳され、2008年の中教審の答申にもあるように、特別支援教育への導入が期待されています。大川先生のご講演により、ICFは今までの教育とまったく異なるというのではなく、「人が生きることの全体像」についての共通のものの考え方・見方であり、これまでの経験をもとにして、さらにそれらを整理するためのツールであること、また、障害があるために困難である点に注目するのではなく、子どもが持つプラス面からみるように障害を捉えなおし、子どもの主体的なニーズにより潜在的な能力が発揮できるようにすること、当事者である子どもを含めた専門家とのチームワークの重要性などについて理解を深めました。これまでも、ICFを踏まえて研究を行っておりましたが、今年度は、学校全体の研究として、教育実践に取り入れることになりました。この間、金沢大学学校教育学類の先生方から多くの助言をいただきながら、また本校の教育にICFを導入することの目的や意義を、常に自問自答しながら研究をすすめてまいりました。皆様方からのご忌憚のないご意見を頂戴し、さらに修正して次年度の総括につなげてまいりたいと存じます。

最後になりましたが、本日の教育研究会にご参加いただきました皆様、また、本研究をまとめるにあたり多くのご指導とご助言を賜りました金沢大学の先生方に、心より感謝申し上げます。

2010年2月

金沢大学附属特別支援学校長

山岸雅子